

報 会

みちのび

平成26年12月
第117号
東京都立学校
情緒障害
教育研究会

平成二十六年度

都情研特別研究部夏季研修会講演（抄録） 「学校全体で取り組む特別支援教育」

帝京大学教職大学院客員准教授
調布市教育支援コーディネーター
インクルーシブ教育システム構築モデル事業合理的配慮協力員

吉本 裕子先生

一、はじめに

私は特別支援学級の担任として勤務した後、小平市内の小学校の副校長としての五年半ほど、学区に養護施設がある学校に勤めました。そこでの体験が今にも生きています。全校児童六百名に対し、養護施設から発達障害の様子を示す子が五十名ほど男子ばかり通っていました。学校の廊下にはゴロゴロと子供たちが寝ている姿がありました。でも、その学校で教育の本質は何かということ、学ぶということは何かということを知りました。

その後、同じ小平市内の鈴木小学校の校長になりました。小平市内で一番小さな学校ですが、その割には発達障害の子が多い学校でした。

二、学ぶということ

学ぶということは、「分かった・できた」という喜びの体験から生まれます。養護施設の子供たちへの取り組みについてお話しします。「死ぬ」「殺せ」が日常語の子供たちで、そういう子供たちは当然、学習のレディネスができておらず学習に臨めずに、授業中は外へ出て行ってしまいます。よく見ていると、学習が分からないから外へ出て行ってしまおうのさうと思いました。そこで、算数の少人

数指導で三学級を四クラス展開にするときに、最後の四クラス目はその養護施設の子供たちを中心に十人くらいのクラスをつくりました。一番ベテランで教え方の上手な先生に担当してもらい、「とにかく分かる授業をしてください」とお願いしました。最初は、床にゴロゴロ寝る子、廊下に出てしまいう子、教室の後ろでバック転をしている子などがいて、「これで授業になるのかな」と思っていました。半年経つたときに、その先生のとて熱心な授業のおかげで十人が十人とも座っていたり、手を挙げて発言したりしていました。正に「分かった・できた」という喜びが学びにつながるという基本を、私は学ぶことができました。

三、小平市立鈴木小学校での実践

平成十九年に校長として鈴木小学校に赴任した当初、教室を飛び出す児童がおりました。パニックになる一年生も何人もいました。先生たちは学級経営が困難だと思っていました。もぐら叩きのような、傷口に絆創膏を貼るような対応、対処療法しかできていなかったことから、これは特別支援教育を基盤とした教育活動をした方が早いのではないかとということを考えました。

学校要覧に「家庭・地域と共につくる教育―一人一人が輝く学校」にしたいということ掲げました。「一人一人が輝く学校」の「一人一人」は、もちろん子供たちです。特別支援の子供たちが輝く学校ではなくて、子供全てが輝く、一人一人が輝く学校をつくりたいということでした。もう一つは、先生たちが疲れ切っていましたので、教員一人一人も輝いてほしいという願いを込めました。それから、子育てに疲れているお母さんやお父さんもらっしやいました。そして、地域も。地域、保護者も輝いてほしいという願いをもつて、学校づくりをしようと思えました。

二十年と二十一年に研究をして、二年目に発表をしました。発表したときにまとめ、その後五年間、この方針を進めることができました。その内容をお話ししたいと思います。

四、4つのチェンジ

一人一人が輝く学校として、四つの教育改善というものを考えました。その基盤となるのは安定した生活環境で、その上に一人一人を大切にしている学級経営が必要だとうという結論に達しました。これは、特別支援の子を大切にしている学級経営ではなくて、全ての子供を

大切にする学級経営が必要だということ。その上に、教育環境の改善があり、さらに、その上にユニバーサルデザインの授業、いわゆる授業改善が必要だろうということ。これを私は考えました。また、それだけではなく、ユニバーサルデザインをもってしてもついでこれられない子のために、個に応じた指導が必要だろう、それを「児童サポート体制」ということで考

えました。そして、鈴木小学校には通級指導学級があり、校内支援はずっとしていたのですが、あわせて近隣校支援も考えました。授業改善、教育環境、児童サポート体制、通級による支援を「4つのチェンジ」とし、教育改善を掲げました〔資料1〕。

五、授業改善

ユニバーサルデザインの授業、

〔資料1〕
「4つの教育改善」の図



何人かの特別支援の子が分かる授業は、実は他の子もすぐく分かりやすい授業だということなので、授業改善のために三つの手だてを考えました。視覚の手だて、聴覚の手だて、運動感覚の手だて、この三つを軸にして授業を進めるということ。それでも分からない子については個に応じた手だてを考えましょうという発想をしました。

(1) 視覚の手だて

視覚の手だてというのは、注目させる工夫です。しゃべるよりいろいろな視覚的教材を、たとえば写真で出した方がいいだろうとか、絵で出した方がいいだろうというの、一番単純な理由です。また、板書の工夫、これが重要になってきます。次に一時間の流れが分かる板書計画を立てることです。考え方、自分の考え、友達のか、まとめ等の項目をいつも同じ形式で板書します。そうすると、途中でどこまで進んだか分からなくなっても、場所が決まっているので、だいたい内容が分かります。それをノートに写すと大変分かります。また、小平市では大型のテレビがようやく付いたので、その活用も考えました。板書では授業の内容を、必要な資料は大型テレビに映して必要がなくな

なったら消せばいいということになりました。

(2) 聴覚の手だて

聴覚の手だては実に簡単なことですが、かなり重要です。また、教師の声の大きさというのも結構重要なことです。担任の先生に「もうちょっと声のボリュームを下げてください」「丁寧な口調でお願いします」とお願いすると、音に過敏さがあるアスペルガーのお子さんの不安感が解決したということがありました。また、先生たちは何回も同じ話を繰り返したり、「分かった？」などと必要以上に聞いたりしてかえって分かりづらくなっている場合もあるので、気を付ける必要があります。

(3) 運動感覚の手だて

運動感覚の手だてとは活動を取り入れた授業形態のことです。これも当たり前のことですが、導入・展開・まとめの流れを踏まえて授業の形態を飽きないように工夫しましょうということ。話し合い活動を適度に入れたり、書く作業などのいろいろな操作活動を取り入れたりということ、もう一度子供の視点に立って見直しましょうということ。

(4) 個の支援

個の支援というのは、例えば文字を想起できない、思い出せない子がいたら、その子が学習に入れ

る手だてを工夫するというところで、わり算をしたくても九九を覚えられないのでわり算ができないのであれば、九九カードを見せることでわり算ができるようにしてあげるといいことです。

(5) 指導案・研究協議の改善

授業改善の実際として研究協議のあり方を変えました。指導案も変え、先程の三つの手だてを必ず入れるようにしました。そうすると、一つの活動について視覚的手だて、聴覚の手だてはあるだろうかと考えます。この活動についてはどういう手だてがあるだろうかを考えることに意義があるのです。それから個別の支援を考えるようにしました。支援員の人が入ってではなくて、担任が一人で授業をしたときに個別の支援、具体的な支援がどれだけできるかを考えたのです《資料2》。

ここで注目すべきなのは、特別支援の研究を進めていくと、先生たちが特別支援のことを夢中で考えるようになったということです。そのため、支援の数はものすごい数になりました。そのうち、「これは少し支援し過ぎではないか？過保護になっているのではないか？」という言葉が先生たちから出ました。「これは支援し過ぎだから、支援という視点は必要だけど、あえて支援しない支援という

のもある」という不思議な言葉が出るようになりました。支援し過ぎてはいけない、でも支援の視点はもとどうということでした。

《資料2》

本時の学習

- (1) 本時の目標
手紙文や会話文から想像を広げて、かえるくんとがまくんの幸せな気持ちを読み取り、それが表れるように語る。
- (2) 本時の学習(8/14)

過程	・指導の手立て		*評価
	◎学習活動	・児童の反応	
導入	1. フラッシュカードで漢字の読み・書きを確認する。(新出漢字5文字・教文を含む) 2. 前時の学習を振り返る。 ・落ち込んでいるがまくん、励まそうとしているかえるくんを想起する。 3. 本時のめあてと学習の姿を確認する。 ・P7とP15の挿絵を比べることで気持ちの変化があったことに気付かせる。	聴覚的手立て? 運動感覚的手立て ◎ TVに漢字とその読み方をPで提示し、タイピングを合わせて声に出して読ませる。 ◎ 書き順を声に出して漢字を空書きさせる。 ◎ 挿絵ごとの登場人物のしたことの表をもとに、振り返る。また、TVに挿絵を提示する。 ◎ ホワイトボードに学習の流れを提示して説明する。 *本時の活動内容を把握している。	個別の手立て ◎ D児 タイピングを合わせて声を出すように促す。 ◎ Q.A.B.C児 学習のプリントを一緒に見せる。 ◎ Q.A.B.C児 目の口の表情、腕の姿勢を指し示す。
四のぼめんのがまくんとかえるくんのしあわせな気持ちを 考えながら 語ろう。			
展開	4. 場面場面を役割読みする。 場面ががまくん、かえるくんを隣同士交代で音読し、地の文を教師が音読する。 5. 挿絵の様子や登場人物の気持ちを読み取る。 (1) かえるくんの書いた手紙を読み取る。 ・ 親愛なる、親友の意味の確認。 (2) がまくんの気持ちを読み取り、ワークシートに記入する。 ・ 「めあて」に答えた時のがまくんの気持ちを考え、発表する。 (3) かえるくんの気持ちを語り、ワークシートに記入する。 ・ 空欄で線を下ろしている時の気持ちを考え、発表する。	◎ 二人の様子を想像しながら読むよう、朗読する。 ◎ Q.A.B.C児 挿絵の場面を直したり、挿絵と漢字の文章をなぞり、一緒に読む。 ◎ Q.A.B.C児 想像したときかえるくんの気持ちを言葉で表現する。(2)で生じた手紙をもとにかえるくんの気持ちを想像させる。 ◎ Q.A.B.C児 Q.A.B.C児が質問的・怒りっぽい等の様子で「あま」を音読し比較して考えさせる。 ◎ Q.A.B.C児 想像したかまくんの気持ちを絵と文章で表現できるワークシートを活用し、ペアワークを用いて、顔、ウラス全体で発表させる。 ◎ Q.A.B.C児 めあてに答える、発表することができる。 ◎ P15の挿絵に、吹き出しで気持ちを表かせる。 ◎ Q.A.B.C児 がまくんの様子を見た、かえるくんの気持ちを想像させ、なりきりマイクを用いて発表させる。 *かえるくんの気持ちをがまくんの気持ちを、創造をもとに想像してワークシートに書くことができる。	◎ Q.A.B.C児 ワークシートの内容をそのまゝ読んでよいので、自分の考えを基盤するよう促す。 ◎ Q.A.B.C児 「よく書いているね」など、声をかけ、褒める。 ◎ Q.A.B.C児 椅子を引いて姿勢を直したり、顔に貼れる、発表者に注目させる。
	6. 二人の幸せな気持ちを想像しながら、音読をする。 ・ 会話文のみ、隣同士交代で役割読みをする。 ・ 音読チェックカードに記入する。 ・ P15の良かったところを発表する。 7. 次時の学習について、見通しをもつ。	◎ 教師、ワークシートをもとに、二人の様子や気持ちを振り返り、それが表れるように音読させる。 ◎ Q.A.B.C児 「ア」のいいところを探しなから役割読みをするように促す。 *二人一組で活動できる。*二人の気持ちが表れるように工夫して音読することができる。	◎ Q.A.B.C児 一文一文字丁寧に読むよう、教師の本文を指し示す。

身が気付いたということですから、それから授業が変わりました。協議会も変わりました。発言の内容も深く変わって変わってきたのです。

そして、さらに研究が進むと、「教科の単元のねらいを達成しているのかが一番の問題ではないか？」という声があがってきました。当たり前のことかも知れませんが、そこに気付いたのです。特別支援の手だてがうまくいけばそれでよいのではなくて、手だてを通じて教科のねらいが達成しているかどうかの問題だということに、大変遠回りでしたが、教師自

教科のねらいを達成するための授業であって、特別支援が目的ではないのです。目標もなく、あくまで手だてでしか過ぎないということに教師自身が気付いていったのです。

(6) 授業者支援会議

授業者支援会議というのは研究協議会です。内容としては、授業者が授業のねらいと工夫を伝え、それを中心に、その他のことを含

めて授業を見ます。分科会ではそれぞれに付箋を持っていきます。色の違う付箋で、一枚は授業者支援のために「ここはよかったよ」という内容を書きます。もう一つは「ここが課題で、ここを工夫した方がいいよ」ということを書きます。それを持って分科会に臨むので、「私も同じです」ということなら初任者でも言えるし、十五分でもかなり充実した話ができるという思いを教員たちはもったようです。その会を重ねると様子が変わり、貼られる紙が少しずつ少なくなってきたのです。なぜ少なくなったのかと聞くと、「視点が絞られてくると、考えることは同じなので」という返事でした。授業者支援会議の質の高まりとしては、話し合いの視点が絞られた、授業改善の視点を共有することができたということです。そして何より私が一番期待していた、明日からの授業改善につながりました。授業者だけの成長ではなく、若い人が先輩の授業を見たときに「明日からこの教材を使おう」「私でも使える」などと簡単に学べるような授業改善ということでした。

六、教育環境の改善

(1) 教室掲示・教室環境

教育環境の改善も行いました。一つは前面すつきり。何かの記憶

を維持するのに、途中で刺激があると記憶の保持が持続しないという研究があります。聴覚や視覚の刺激が強すぎると記憶を維持することができないということですが、前面で黒板を見るときに違う要素がチラチラしていると記憶の邪魔になることが証明されています。必要な掲示は、横面や後面に貼れ

《資料3》



ば良いのです(《資料3》)。テニスボールを机やいすの脚に履かせることもしました。グループ活動などで机を動かしたときの大きな音が出ないように、静かな環境で過ごせるようにということです。

(2)教材・教具の支援ツール

それから、ホワイトボードの活用も積極的に行いました。小さな

ホワイトボードを掲げて一時間の流れを書きます。「今日は五の段の九九を勉強します。こういう方法でやります。最後に練習問題をします。」という簡単なものを書き、発達障害の子は安心して授業に臨めます。これをやることで授業がブレなくなり、子供だけでなく教師自身もよかったです。話でした。また、時間を守るようになり、発達障害の子は、始まりも大事なのですが、終わりがきちんと終わるというのも重要なことです。

(3)学習ルール・生活ルール

四月に学年が変わると発達障害の子はいつも不安になります。学級の先生が変わるといろいろやり方が変わるからです。手を挙げて立つのか、「はい」と言うかわからないか、ロッカーの片付け方が違うなど、そういう一つ一つを全部覚え直すというのは非常にストレスがたまることなのです。学校全体でルールを統一することができると、どの先生ときも共通ルールがあるということで安心して、児童の困り感を減らすことができます。発達障害の子だけではなく、みんなが安心して過ごせるということです。

七、校内サポートシステム

(1)校内委員会の取り組み

校内サポートシステムというのは児童サポート体制のことです。校内委員会のあり方も考えました。スクールカウンセラーが来る毎週木曜日三校時に開きました。条件としては、時間は四十五分から一時間で済ませること、メンバーが二人以上いたら始めること、校長がいなくても始めてよいこと、終わったときに一つでもよいから解決策を出して終わることの四つを提示しました。そして、そこで決まったことを職員に周知しましょうということです。

(2)放課後の学習支援

特別支援の対象になる発達障害の子の中には、学習が定着してない子が多くいました。鈴木小のスクールカラーがグリーンだったので、「グリーンスクール」という名称にして、放課後の学習支援を行いました。プリント学習中心にしました。たとえば二年生には「二年生のこれだけのプリントをしたら卒業ね」とどんどん取り組ませ、一学期中にそれをクリアした子には「もうあなたは家で勉強できるからいいね」と話しました。二学期になると残したい子が大半残るようにしました。プレテストをして実態を調査して、一人一人に合った教材を用意しました。プリントは、算数なら問題が六問くらい量の少ないプリントを用意

しました。プリントをたくさんやるといのがポイントで、振り返ったときに、プリントのとじられたファイルを見て「わたしってこんなに勉強できるようになったんだ」と思わせてあげることがすごく大事だと思います。「成果物を蓄積せよ」というのが私の改革の一つの方針でした。お助けグッズを使って学習させると、教室でもうまく使えるようになりまし。グリーンスクールの成果は学級での授業にもすすんで取り組むようになつたということ。それから、お助けグッズの活用で課題解決の力が付いたということ。

もう一つの成果は、子供の見方が変わったということです。グリーンスクールで指導するのは、担任、通級の担任、ティーチングアシスタントという学習支援員です。担任が学級の中ではなかなかよさを見付けることができなかった子も、こういうところでのよさに気付くことができたということです。繰り返しですが、「分かった」「わたしもできた」という子供が多くなつたということが、何よりの成果ではないかと思いません。

八、通級指導学級担任

次に、通級指導学級担任による

校内・近隣校への支援についてです。校内支援は日常的に行っています。さらに研究が進むと、通級指導学級の先生には通常の学級の補教に出してもらいました。補教に出ることで、通級の先生は通常の授業の感覚を学ぶことができて、通級にこの子が戻ったときにどういう状態かを知る良い機会となるので、積極的に出てもらいました。通級の先生には、夕方になつたら必ず職員室に行ってくださいと言いました。なぜかという、職員室にいると通常の先生が「この子についてどうですか」という相談をしてるので、そうした交流がうまくいくようにと頼んだのです。

近隣校支援については、通級の近い近くの学校で、通級の子の在籍校に行きました。単なる在籍校訪問ではなくて、担当者が特定の学校に毎週行くようにしました。そして、通常の先生に対して、より具体的な分かりやすい支援をしました。やりにくさの理解と指導の有効な手だてを提案できるかというのと、集団の中の個に合った指導の具体策を考えられるか、集団の中で個に応じた指導を担当一人でする場合の具体的な提案ができるかというのは、通級の先生の腕の見せどころではないかと思えます。

九、研究のまとめ

研究のまとめですが、困っているのは児童という視点に全職員が立てたということがあります。最初に「私は学級経営が大変なんです」と訴えてきた教員がいました。それは先生が困っていたのです。研究を通して、最後には「困っているのは児童だ」という視点に全職員が立てました。全職員というのは、教員だけではなくて事務の方も主事さんも子供一人一人を理解することです。次に大切なのは、すべての児童の理解と支援を考える学級経営です。特別な子だけの理解をしようとするのではなく、本当にすべての児童一人一人を理解しないとだめだということです。先生たちが自ら気付いたのです。それから、担任が安心して学級を開ける学校体制、安心して学級を開いて困っていることを学校全体で解決していきましようという体制になりました。そして、何より子供一人一人が安心できる居場所づくり、子供たちがどこに行っても私を受け止められる学校という風を感じられると、安心できるのではないかとまとめができました。

十、ユニバーサルデザインの授業

ユニバーサルデザインの学級経営でも、どの子にも平等だとい

条件が必要です。それはえこひいきがなく、「あの子だけずるい」とならないということです。

それから、担任は子供一人一人の心に正対する姿勢が必要です。きっちり向かい合って、君のそこがいいから褒めているということが分かるように褒めてあげないところの子もだめです。逆に叱るときも真剣に叱ってほしいと思いません。口先だけで「だめですよ」と言っても心に響かない、届かないと思いません。

配慮を必要とする児童への支援とは、一人一人の特性ややりにくさを理解してその対応策をもっている、具体的な支援の方策をもっているかどうかということが大切です。焦点化、視覚化、共有化、他に時間や場の構造化などを考え、教科の指導を追究していくと特別支援教育と同じ道を辿ると私は思っています。力のあるベテランの先生は、わざわざユニバーサルデザインと名前を付けなくても、当たり前のように焦点化し視覚化し共有化し、発問の工夫もし、ということをたぶんしているのだらうと思えます。授業研究を真剣に追究すれば特別支援に通じるものがあると、いろいろな研究授業に参加してみたいと思います。一人一人の子供に思いを馳せる、この子が分かるためにどうしたらよ

全情研兵庫大会報告 全情研事務局長 有澤直人

八月七日八日の二日間、西宮市において第四十七回全国情緒障害教育研究協議会が開催されました。全国から約五百名の参加があり活気のある大会でした。

特別講演は、中村健・徹親子の共演でした。徹氏は六歳直前にドイツのミュンスター大学病院で高機能自閉症の診断を受け、現在はピアノスト、作曲家として活動しています。講演は、父親の健氏が、徹氏の幼いころからの歩みを振り返りながら、これまでに出会った様々な困難を、自閉症の特性に触れて解説され、合間に徹氏の作品のピアノ演奏（ソロ、親子での連弾）をはさんで進みました。父健氏の語りは優しく愛情にあふれ、自閉症の息子さんが歩んできた道のりを、ポイントをとらえて解説してくださいました。絶対音感があることで気付くテレビコマーシャルの音楽の調性の変化や、言葉を書義通り受け取ることでの様々な困難、人との関係の構築の難しさ、抽象的概念の理解の難しさなど、実際に起こった事柄をもとにお話を伺うことができたことは、参加者にとって貴重な経験でした。

夏季集中研修会報告

練馬区立豊玉南小学校 坂井英子

情緒障害等通級指導学級の担任を対象とした夏季集中研修会が八月四日五日の二日間、中央区立月島第一小学校をお借りし、講演会、グループ討議という内容で開かれました。小中合わせて両日とも三百名程の参加者がありました。

一日目の講演は「発達障害がある児童・生徒の学習支援の実践」という演題で東京都杉並区立済美教育センターの月森久江先生に御講演をいただきました。思春期の子供の特徴と認知のつまずき、教師の意識改革の必要性、通級指導学級の課題と今後の役割についてなど、幅広く学ぶことができました。

二日目の午前の講演は「キレやすい子の理解とその保護者や援助者への支援」という演題で東京学芸大学の大河原美以先生にご講演いただきました。午後は十名前後のグループに分かれ、スーパーバイザーをお招きしてグループ討議を行いました。

毎年、情緒障害等通級指導学級が急激に増設される中、他地区の先生方と交流し、様々な情報交換をすることができました。

いかということ先生一人一人が考えることが授業改善になるのだと痛感しています。

十一、最後に

「特別支援教育は科学である」という言い方があります。たとえば、LDの人に間違った対応策をしてもだめなのです。科学的根拠に基づいて指導することが大切です。しかし、私は科学だけではだめだろうなと思うのです。同時に「教育は愛」という言葉を痛感する、感じる時代だと私は思います。方策ばかりがあつて愛がない、子供一人一人を大事にする授業でなかったら、それは通じないと思います。その子を受け止めてあげて指導していくという気持ちには、愛しかないと思っています。

最後に、今日のテーマ「学校全体で進める特別支援教育」を考えたいくと、学校全体で取り組む特別支援教育には、教職員全員の心が一つになることが大事だと思っています。ぜひみなさんの学校も学校全体で特別支援教育を推進していただければ、一人一人の子供たちが幸せな生活を送ることができるようになると思っています。

編集後記

編集・発行 広報部

広報に関する御意見、御感想がありましたらお寄せください。

八王子市立由井第一小学校

☎ 042-642-4201

印刷 (株)ワールドミーティング

